六十三の手習い

羊蹄医師会
昆布温泉病院
小　松　正　伸

ひょんなことから、書道を始めてしまいました。元はといえば、９年前の自分の病気。ステージⅣと診断されて、大学病院に６ヵ月間入院している間、私の奥さんはほぼ毎日自宅と病院を往復してくれました。そのために20年ほど親しんでいた書道を、きっぱりと止めてしまいました。私は先進医療の恩恵と、病院のスタッフの方たちの細やかな治療や励ましのおかげで、なんとか生きて退院できました。

自宅に帰ってみると彼女の書道部屋は、高価な筆や大きな紙が積み上げられて、主を待ちながら淋しそう。このまま彼女が筆を折れば、みんなただの燃えるゴミ。それじゃあんまりかわいそう、もったいない。１年ほど体力の回復を待って、自分も書道を始めるから、奥さんも再開しようよと誘い出しました。悪筆が少しは直るかとの、淡い期待も。

かくて彼女の師匠、中野北溟先生の教室に晴れて入門させてもらいました。中野先生は当時88歳、近代詩文書では日本の重鎮、96歳になった今も現役です。そして同じく指導者として、高橋陌遥先生がおられました。教室で男性は、先生たちと私だけ。周りは年上・年下のおば様たちですが、ただのおば様じゃぁない。皆さん、数十年のキャリアと輝くような受賞歴を持っている方たちです。そんな中で私は、中学を卒業してから書道は初めてという、なんとも心もとない年食った新入りでありました。もちろん直接の師匠は奥さん。紙の大きさ、墨の色、筆の手入れなど道具から筆の持ち方など、一からの厳しい指導が続きました。まずは、基礎の臨書から。普段でも家でのパワーバランスから言えば、奥さんの方がずっと上だったのが、このハンディにより私の存在はますます弱小化したのであります。ですから私の使っている筆は、いまだに奥さんの使い古し。

お二人の先生に優しく教えられ、周りのおば様たちのほめ上手に乗せられていくうちに、だんだんと書くことが楽しくなってきました。賞状を集めることに興味はないのですが、公募展にもたまに引っかかるようになりました。真っ白い紙の上に黒い墨で自在に描かれる造形の美しさに、書道の深みを知りました。書の作品は二次元ですが、その中には書き手のリズムや息づかいなど別な世界が広がるのが、少しだけ分かるようになりました。

近代詩文書は、言葉選びから始まります。奥さんを含めた先輩たちからは、花鳥風月や自然の美を織り込んで、字面の見栄えがする言葉を勧められます。でも地域での医療に長く携わってきた私は、どうしてもメッセージ性のある言葉を選んでしまいます。生命の移ろう哀しさ、生命を育んでくれる自然、生命を守るための環境や平和を願う、先人たちの言葉を書で表現したい。この強い思いはあるのですが、技術が未熟で書けないもどかしさを噛みしめています。この悔しさから、ますます書にのめり込んでしまいそうです。

近代詩文書を初めてご覧になる方は、なんと書いてあるかたぶん読めないでしょう。まるで、子供のなぐり書き。でも、近代詩文書の原則は「読めること」。解説されれば、白と黒の織りなす美しさ、筆使いに表された“静中動”に気づかされるでしょう。

さて、８年経って私の悪筆は改善されたかというと、結局ちっとも変わりませんでした。「悪筆というものはない、それは単なる個性」という誰かの言葉を信じましょう。それでも書を始めてから、実に多くの忘れた字、書けない字、読めない字、意味の分からない字があるのかを思い知らされました。まさしくパソコンの弊害。アナログの究極である書道を目指す以上はと、スマホで簡単に調べるデジタル時代に抗して、なるべく辞典を引いて語源までをたどるようにしています。そしていつか師匠である奥さんを連れて、西安の碑林博物館を訪れ、顔真卿や王羲之の碑を、間近に見たい、触れてみたいと願っています。

前回年男の時には、65歳くらいで海外ボランティアに行きたいと高邁な思いを綴って、同期の医者にほめられたのですが、病気になってあえなく断念。さて、次の年男では何を書こうか、と思い悩む前に、まずその時この世に生存していなくては。この拙い文章を読んでくれました皆様、どうぞご健勝に過ごされますよう、そして次回作をご期待ください。